

実践報告7

実践の機会としてのパフォーマンステストと評価

愛知県立岡崎高等学校 教諭 市川 雅之

1 はじめに

さまざまな言語活動を通じて学習した新出語句や表現、文法等を、演習問題に答えるためではなく、生徒が自分の考えを伝えるために使用する機会をつくりたいと考えた。そこで、今回のパフォーマンステストにおける発表テーマを、その単元の内容について自分で実際に作業、体験し、観察して考察したことを発表するものとした。生徒自身の経験や夢を語るのではなく、客観的な説明をする必要があるため、自分がふだんよく使う語彙ではならず、教科書で学んだ語句等を自発的に使用することになるのではないかと考えたためである。また、別途学習したプレゼンテーションの型を、知識にとどめず実践につなげる機会として、今回パフォーマンステストを実施した。

2 単元の目標と言語活動

(1) 教材

教科書：PROMINENCE（東京書籍）

単元：Lesson 8 The State-of-the-Art Origami Engineering

(2) 補助教材

教科書：Winning Presentations（成美堂）

(3) 単元の目標

東京大学名誉教授の三浦公亮博士が考案した「ミウラ折り」についての文章を読み、ミウラ折りの特徴や産業への応用事例と自然界に見られる事例について理解する。

(4) 言語活動

- ・リスニング、音読
- ・プレゼンテーション（ミウラ折りと通常の折り方（折った角が直角となる折り方）のそれぞれの特徴と違いを観察し、自分の考えを英語で発表する）

3 関係する領域別目標（岡崎高校 1年生のCAN-DOリスト）

聞くこと	・140wpm程度の速さで読まれるまとまった量の英語を聞き、概要や要点を捉えることができる。 ・会話やスピーチを聞き、概要を理解できる。
読むこと	・600語程度の説明文、対話文、物語文などを読み、情報や考えを理解したり、概要や要点を捉えたりすることができる。
話すこと [発表]	・身近な話題や身の回りの出来事について平易な表現を用いて説明し、それに対する自分の意見を簡単に述べるができる。
書くこと	・日常生活の話題や興味・関心のある出来事について、60語程度の英語で自分の意見を書くことができる。

4 単元の評価規準（五つの領域ごとの評価規準の設定）

評価の観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
読むこと	<p><知識> 物事が列挙される時のイントネーションについて理解している。</p> <p><技能> そのイントネーションを意識し音読している。</p>	ミウラ折りに関する英文について、正しく読み取り、概要や要点を捉えている。	ミウラ折りに関する英文について、正しく読み取り、概要や要点を理解しようとしている
話すこと [発表]	<p><知識> 情報や自分の発見・考えを述べるために必要な語彙、表現を理解している。</p> <p><技能> 情報や自分の発見・考えを話して伝える技能を身に付けている。</p>	本文で読んだ内容に加え、自分の考えを新出の文法事項やキーワード、資料を使いながら聞き手に伝えている。	本文で読んだ内容に加え、自分の考えを新出の文法事項やキーワード、資料を使いながら聞き手に伝えようとしている。
書くこと	<p><知識> 分詞構文、第2文型（補語がthat節）、仮定法過去完了の使い方を理解している。</p> <p><技能> それらを用いて文章を書くことができる。</p>	本文で読んだ内容に加え、自分の考えを新出の文法事項やキーワードを用いて文章にまとめている。	本文で読んだ内容に加え、自分の考えを新出の文法事項やキーワードを用いて文章にまとめようとしている。

5 言語活動を中心とした指導と評価の計画

時間	ねらい、学習活動	評価の観点			指導上の留意点 評価規準（評価方法）
		知	思	主	
1	<p>【ねらい】 新出語句を学習する。</p> <p>【学習活動】 ①全Part（Part1～4）新出語句・表現の音読 ②辞書指導 ③ペアワーク（単語クイズ）</p>				本単元の新出語句だけでなく、派生語等、形による品詞の判断も指導する。
2	<p>【ねらい】 新出文法を学習する。</p> <p>【学習活動】 ①新出文法の説明 ②例文音読</p>				
3	<p>【ねらい】 イントネーション指導</p> <p>【学習活動】 ①全Partリスニング ②本文音読（コーラス、シャドーイング、クローズテスト等） ③T/Fクイズ</p>				
4 5 6	<p>【ねらい】 ミウラ折りの特徴や産業への応用事例、自然界での事例について、内容をおさらいする。</p>				Partごとに音声CDを聴いた後、重要ポイント、間違いやすいポイント等のみ取り

7	【学習活動】 ①各Partリスニング，音読 ②各Partのポイント説明 ③内容に関する英問英答				り上げ，説明する。
	期末考査	○	○		
8 9	プレゼンテーションの型（Listing）を学ぶ。 【ねらい】 聞き手にとって理解しやすいプレゼンテーションの技術を身に着ける。 【学習活動】 実演モデル鑑賞，分析，模擬演習				使用教材：Winning Presentations（誠美堂） Unit 5 Listing 実演モデルを鑑賞し，プレゼンテーションの型（Listing）の構造，表現，音声，ジェスチャー，アイコンタクトを習得する。
10～ 12	パフォーマンステスト	○	○	○	ループリックを用いて評価する。

6 パフォーマンステスト

(1) ねらい

- ア 自分の経験のような生徒にとって身近なテーマではなく，観察による考察を発表することにより，生徒が教科書で学習した語彙を自発的に使用するようにする。
- イ 効果的な発表のための技術であるプレゼンテーションの型（Listing の構成，適切な音声，アイコンタクト，ジェスチャー）を実践する。

(2) 実施方法

- ア 10 時間目：ミウラ折りの実践と観察
- (ア) ミウラ折り罫線付きの紙と通常の折り方用（角が 90 度になる折り方）の白紙を 1 枚ずつ生徒全員に配付する。生徒はミウラ折り，また，通常の折り方で紙を折る。
- (イ) 違いを考えるための補助資料として，ミウラ折りで作成された地図と通常の折り方の地図を配付。なお，実際には生徒全員（最大 41 名）分を用意できなかったため 5～6 人グループを作り，各グループにミウラ折の地図，通常の折り方の地図を 1 部ずつ配付し，グループ内で共有するようにした。
- (ウ) ミウラ折りと通常の折り方の違いを個人で考え，英語でワークシートに書かせる。他生徒との相談は不可とする。
- イ 11 時間目：発表
- (ア) 生徒に評価用ワークシートを配付。ただし，生徒による評価は成績に入れない。
- (イ) 一人 2 分間で発表。
- ウ 12 時間目：発表と振り返り
- (ア) 一人 2 分間で発表。
- (イ) ループリックによる自己評価及び評価用ワークシートの振り返り欄を記入。

(3) 指導上の留意点

- ア 最初に生徒にループリックを提示，採点基準について説明する。
- イ 新出語句・表現を使用することを評価基準に盛り込まない。

7 ルーブリック

(1) 評価方法

ア パフォーマンステストを実施し、ルーブリック(※1, 2)を用いて評価する。

(※1) ルーブリック「主体的に学習に取り組む態度」における「プレゼンテーションの型」

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① Listing の構成 ② 適切な音声 (聞き手に分かりやすい声量, 抑揚, スピード) ③ アイコンタクト (原稿を見ずに相手を見る), ④ ジェスチャー |
|---|

(※2) ルーブリックにおける「思考・判断・表現」における三つの条件

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 自分が観察し考えたことを述べている。 ② ミウラ折りと通常の折り方の違いを<u>対比して</u>述べている。 ③ ミウラ折りと通常の折り方の違いについて<u>具体例を挙げて</u>述べている。 |
|--|

イ パフォーマンステスト後、ワークシートを回収し、その内容を評価する。

(2) 評価の領域 (内容のまとめ): 「話すこと [発表]」

評価	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価 規準	<知識> テーマに関する文法・表現を 理解している。 <技能> テーマに関して、適切な文 法・表現を用いて、自分の 考えを聞き手に伝える技 能を身に付けている。	聞き手に伝わるによ うに、三つの条件に基 づいて自分の考えを適切 に伝えている。	聞き手に分かりやすく伝わるよ うに、三つの条件に基 づいて自分の考えを適切 に伝えようとしてい ている。
a (5点)	・文法や語彙, 表現が正し く使用されている。	三つの条件を満たした 上で、聞き手が理解し やすい工夫をして、伝 えている。	・三つの条件を満たした上で、伝 えようとしている。 ・プレゼンテーションの型4項 目全てに沿って話している。
b (3点)	・文法に多少の誤りはある が、理解に支障のない程 度の語彙や表現を使っ て話し、伝えている。	三つの条件を満たして 話し伝えている。	・三つの条件を満たして話し伝 えようとしている。 ・プレゼンテーションの型の内、 3項目に沿って話している。
c (1点)	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていな い。	「b」を満たしていない。

※「おおむね満足できる」状況を b とする

8 実践報告

(1) 成果について

ア ルーブリックにおける「主体的な学習に取り組む態度」の項目に、プレゼンテーションの型に沿うことを含めたため、ほとんどの生徒が事前に学習した Listing 型に沿った分かりやすい発表をすることができていた。実践を通じて生徒はこの型を身に付けることができた。

イ ルーブリックに明示しなくても生徒たちは自身の発表において、その単元の語句や表現を用いていた。教科書に掲載されている単語や表現をただ知識として覚えるだけでなく、自発的に使用するというねらいに対して、今回のパフォーマンステストにおけるテーマ設定は有効であった。

ウ 生徒の振り返りにおいて、ふだんの small talk 活動等で扱っているテーマとは全く異なり、観察して考察したことを述べるのは難しかったが、楽しかった、という声が多く見られた。

(2) 実施上の課題と改善策

ア 思考・判断・表現の評価について

(ア) 課題

「思考・判断・表現」の評価 a には「聞き手が理解しやすい工夫をして」という条件を付した。これには、生徒が何か資料を自分で用意したり黒板を使ったりと生徒の創意工夫に任せるという意図があったが、生徒からは「具体的に何をしたらよいかはつきりと指示してほしい」という要望が少なからず挙がった。なお、質問してこなかった生徒で、自分で資料を作成してきた者も多くいた。

(イ) 改善策

表記を「聞き手が理解しやすいよう自分で自由に創意工夫して」と書き換える。具体的な例を出すことにより、自分のアイデアよりもその例にならなことをしなければならぬと生徒が思うことが懸念されるため、具体的な例を出すことは避けたい。

イ 発表内容について

(ア) 課題

発表内容が似通ったものになる。グループ内で相談せず、自分で考察したことを発表することを求めたが、皆同じような発表内容であった。教員が生徒に是非気付いてほしいと思った事柄があったので、補助資料として地図を提示したが、このことが発表内容の偏りを招いた一因であると考えた。

(イ) 改善策

教員が生徒に気付いてほしいと思った事柄については、パフォーマンステスト後の振り返りで生徒に提示する。また、発表内容を、折り方による違いだけにせず、応用の可能性や教科書に載っていない例等を調べて発表するなど、工夫する。

ウ 生徒の発表時間について

(ア) 課題

生徒の発表時間（英語を使用する時間）が短い。1 コマ 50 分の授業で生徒 41 名が発表することはできず、また、授業進度や考査範囲との兼ね合いで 3 コマを費やすことは難しかったため、発表に 2 コマを充てた。しかしながら一人 2 分の発表時間は短すぎ、予め 2 分であると伝えてはいたものの、特にしっかりと準備してきた多くの生徒にとって満足のかない発表になってしまった。また、生徒は自身の 2 分間の発表以外は、他生徒の発表を聴き続けるだけとなってしまった。

(イ) 改善策

本校ではまだ環境を整備中であるが、生徒が授業中にタブレットでロイロノートを使用できるようになれば、発表をロイロノートで録画し提出させる形式にできる。このようにすれば発表時間（英語使用時間）をもっと長く設定することができると思料する。ただし、録画・提出方式にすると、発表において聴衆に対するアイコンタクトを意識することがなくなってしまうこと、また質疑応答ができないというデメリットがある。

エ 質疑応答について

(ア) 課題

生徒同士、教員と生徒間での質疑応答がない。発表時間の制約上、質疑応答の時間を取れなかった。

(イ) 改善策

質疑応答は対面形式にしないと行うことができないため、上記の改善案2の録画・提出方式を取れなくなる。クラスを分割して20人での授業、パフォーマンステストとすることができれば、発表2分・質疑2分という形もできる。ただし、本校でそれを行うのは制約が多いため、質疑応答についてはパフォーマンステストではなく通常の授業の中で養っていくのがよいと思料する。

オ 即興性について

(ア) 課題

即興性に欠ける。今回のパフォーマンステストも「あらかじめ書いてきたものを覚えて発表する」という、即興性に欠けるものであった。実際のコミュニケーションにおいては、話のテーマは定まっても、受け答えは即興的に行うものであるため、自分の考えを即興的に述べる力を育成する必要がある。ただし、今回のパフォーマンステストの手法として観察を行うことに加え、ねらいの一つとして事前準備を要するプレゼンテーションの型の習得を挙げたため、即興性は評価しないことに決めていた。

(イ) 改善策

授業冒頭の生徒間の **small talk** 活動で即興性を養っていく。なお、この時、生徒が文法的な **accuracy** にこだわりすぎることがないように、**fluency** に意識するよう声かけをしたい。

9 参考文献

- ・文部科学省 国立教育政策研究所 (2019) 『学習評価の在り方 ハンドブック 高等学校編』
- ・国立教育政策研究所 (2021) 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校外国語』
- ・愛知県総合教育センター (2016) 「指導と評価の充実に向けて ～学習評価の工夫改善を意識した学習指導のポイント～」

https://apcc.aichi-c.ed.jp/kenkyu/chousa/kiyo/106syuu/106-2_hyouka/28hyouka_2_shiryuu.pdf